

開催地名：滋賀県湖南市	
開催日時	令和3年2月21日（日） 9：00～10：30
開催場所	湖南市役所（オンライン開催）
語り部	吉田 亮一（宮城県仙台市）
参加者	防災士、自主防災組織関係者 約30名
開催経緯	<p>当市では、防災士の連携を目的とした「湖南市防災士連絡会」が昨年度設立され、本格的に活動を開始したところであるが、被災経験もなく、ノウハウが少ないため、自治会などへの指導、協力が十分にできない状況である。そこで、地域の防災力向上のため、他自主防災組織の活動事例、被災時の教訓について講話いただきたく、開催することとする。</p>
内容	<p>（1）防災の基本</p> <p>防災の基本は立場や役割に関係なく、自助・共助・公助と全ての人に関係する。全てに共通しているのは災害への危機感であり、心配ない・あり得ない・大丈夫・まさかと考えることは慎んでほしい。ニュース・新聞等でよく耳にする言葉に、「長い間住んでいるがこのような被害は初めてだ」とか、「まさかこんなに雨が降るとは」とか、「地震は来ない地域だったのに」といったようなものがあるが、防災は危機感と想定以上の備えが基本なので、様々な自然災害に備えて、全ての責任者は最大の危機感と想定以上の備えで命を守ることを意識していただきたい。</p> <p>（2）避難所運営について</p> <p>私は平成17年に町内会の班長になった際に地域防災計画を立案し、町内会から防災部長の役員になって一年間は防災の知識を習得しつつ五年計画の立案を行った。平成18年に町内会総括防災部長となって防災活動を開始し、共助としての防災を意識して様々な活動を行った。具体的には、まずは「防災マップ」の作成、次にマニュアルの作成を行った。さらには「自主防災組織」も作り、そして防災の勉強会の実施を経た上で、防災訓練を実施した。定期開催の防災訓練では、普段自宅や地域にいる大人や高齢者、小学生の子供を中心に行った。なぜなら、働いている大人の方々は、平日に地域に居ないケースが多いうえ、職場や現場等の復旧に駆り出されてしまい、あてにできないからである。</p> <p>また、地域内の介助者として、元医者、看護師、保健福祉士、学校の先生等だった方々を募り、災害発生時の協力を約束して貰うこととした。すべてを行政に頼らず、地域でできることは地域で行うことが重要である。</p> <p>平成23年3月11日に発生した東日本大震災では、指定避難所の責任者を17日間勤めた。私の住む地域では全世帯が5日間停電し、ガスは3～4週間、水道は2週間止まったが、町内会で共助への活動を進めて来た経験が活かされ、指定</p>

避難所は全て地域住民主導で行うことができた。炊き出しは普段学校でやっている小中学生が手早く対応してくれた。掲示でもわかりやすいように書いてくれた。小学生にごみ集積所の設置を頼んだら、わかりやすく分別指示も作ってくれていた。部数が限られている新聞をみんなで共有するため、中学生が壁に張り出してしてくれた。自衛隊が持ってきてくれる様々な物資を体育館に運んでくれたのは小学生であり、中学生は物資の管理台帳を作ってくれ、個数管理にとっても役立った。トイレの水は小学生たちがプールからバケツにくみ、高校生たちがリヤカーを使って運んでくれた。このように、それぞれが自分たちの役割を果たすことで、17日間の運営を市の手を借りずにやりきることができた。

(3) 災害に対する備え

東日本大震災以後、食料、飲み水については1週間分を用意しておくように案内している。災害が起こると、コンビニやスーパーの商品は品薄になってしまうので、少なくとも1週間分くらいの備えは確保してほしい。

お風呂の水についても覚えておいてほしいことがある。お風呂の水は、断水になってしまったときに、トイレのお水として使用できる。いつも浴槽にお湯が入っているように習慣づけておくと、災害が発生したときに有効である。

そして最後に、家族間での災害発生時の安否確認や連絡方法、非常用持ち出し品についての確認についても忘れずに実施し、日頃からの防災・減災に対する積極的な取り組みを心掛けていただきたい。



303 開催地より

東日本大震災以前に行われた災害に対しての準備や、その準備が活かされた避難所運営等について、とても分かりやすくお話しいただいた。今後の当地域での防災活動に積極的に役立てていきたいと思う。